

2013年世界原子力大学(WNU)夏季研修

参加者の研修報告

研修期間： 2013年6月29日～8月11日 6週間

研修場所： 英国 オックスフォード大学

参 加 者（フェロー）

- アンドリュー篠原キリンガきこんば 日立GEニュークリア・エナジー(株)
原子力国際技術本部 原子力海外技術部
- 橋口緑 (独)日本原子力研究開発機構 福島技術本部 復旧技術部／
技術研究組合 国際廃炉研究開発機構(IRID)
- 伴雄一郎 (株)東芝 電力システム社 原子力安全システム設計部
- 吉井敏浩 関西電力(株)美浜発電所 保全計画課

※ 4名の方々は、当協会の「向坊隆記念国際人育成事業」の参加費助成を受けて夏季研修に参加されました。

日立 GE ニュークリア・エナジー（株）
アンドリュー篠原 キリンガきこんぼ
2013 年 9 月 26 日

2013 年度世界原子力大学夏季セミナー(WNU-SI)参加報告

1 概要

2013 年 6 月 29 日から 8 月 10 日の 6 週間に渡り、英國 Oxford University, Christ Church College で開催された世界原子力大学夏季セミナー（World Nuclear University Summer Institute、以下 WNU-SI）に参加した。本年度の研修生（fellow）は 24ヶ国から選ばれた 72 名で、主要な出身母体は、プラントメーカー、電力会社、燃料関連会社（ウラン採掘から燃料製造まで）、規制当局及び研究所であった。また、原子力産業関連の金融業界、法律事務所、調査機関からも参加していた。日本からの参加者は 6 名であり、その内訳は、東芝（1名）、関西電力（1名）、原子力機構（1名）、JNES（2名）及び HGNE（1名）であった。また、日本からの参加者 6 名のうち 4 名は、日本原子力産業協会（向坊事業）の支援を受けての参加者であった。

WNU-SI の研修プログラムは、Faculty presentations、Invited leaders presentations、Group discussions、Technical tour visits 及び Social activities で構成される。Faculty presentations 及び Invited leaders presentations では、毎週異なるテーマの講義及びパネルディスカッションが実施された。Group discussions では、各 Faculty/Invited leaders presentations の後に、8 名程度の fellow が集まり、その日に実施された講演を振り返ると共に、夕刻の講演者とのパネルディスカッションで議論したい課題の整理や講演者から渡された課題について議論をしてロール・プレイなどの準備を実施した。また、卒業テーマに関する調査及び発表準備も Group discussions の中で行った。Technical tour visits では、フィンランドの TVO (Teollisuuden Voima Oyj) 所有の原子力発電所 (Olkiluoto)、Posiva 施設（中レベル及び高レベル放射性廃棄物の地層処分施設）、Fortum 所有の原子力発電所（Lovisa）を見学した他、フィンランドにおける原子力ロビー活動の紹介がなされた。Social activities では、WNU 主催のスポーツ（サッカー、クロッキー等）に加え、fellow 同士の自発的な議論・意見・情報交換会、各国の文化紹介がなされ、交流を深めることができた。

2 プログラム詳細

第 1 ~ 2 週及び第 4 ~ 5 週では、Faculty/Invited leaders presentations を中心に行い、第 3 週では Technical tour visits、第 6 週では Group discussions にて卒業テーマに関する調査・討議及びプレゼンテーション準備を行った。以下、WNU-SI を構成する各プログラムについて述べる。

2. 1 Faculty/Invited leaders presentations

特定テーマに関する講演が一週間ごとに実施され、一日あたり 2 ~ 3 名の講演者から関連する講演をして頂いた。講演後は、fellow 同士の Group discussion を経て、講演者を交えたパネルディスカッション（夕刻）を実施し、日々の講演の総括を行った。具体的な講演テーマを下記に示す。

①世界のエネルギー状況と原子力産業の今後の発展：各国のエネルギー政策などを中心とした講演であった。エネルギーセキュリティ観点から原子力は大きな期待を寄せられているが、福島事故後の一般市民の原子力エネルギーへの acceptability 低下が深刻な問題である。また、これまで原子力は、地球温暖化防止策として大きく期待されていたが、世界経済が減速していることやシェールガスなどの安価な燃料が市場に出回っていることから、短期的には、アメリカ（の一部）などの自由化市場では、原子力発電所設備への投資は厳しいことから、エネルギー資源が乏しい国々や新興国市場などに注力する必要がある。

②原子力産業：原子燃料サイクルのフロントエンドからバックエンドにおける種々の技術、炉型の紹介と開発経緯を中心とした講演であった。具体的には、ウランの採掘・燃料製造プロセス技術、再処理技術、炉型（軽水炉、高速炉）の比較及び炉型の generation 間の対比、small modular reactors など、全般的に技術的な教育を中心であった。当分野の殆どの講演者は、歐州で継続的に原子力発電所計画や建設に関わっている AREVA や

日立 GE ニュークリア・エナジー（株）
アンドリュー篠原 キリンガきこんぼ
2013 年 9 月 26 日

EDF が中心で、自社の技術力のアピールも兼ねた講演が目立った。福島事故までは長期かつ継続的に原子力発電所の建設に携わってきた日本の原子力産業界（メーカ、電力会社など）の講演者は一人もいなかった。これから欧州や新興国市場などへの進出をしようとしている日本の原子力業界としては、大きな広報機会のロスである。私をはじめ、他の日本人 fellow ともに総力を挙げて日本の状況など説明を行い、参加した各国の fellow に十分にアピールを行った。

③原子力技術の非発電分野への応用、放射線防護、原子力安全、原子力関連法令及び規制、核不拡散及びセーフガード：医療、工業、流通分野などにおける原子力（放射線技術）の応用、原子力損害賠償（原賠）など原子を取り巻く国際的な法律・条約の枠組についての紹介があった。特に、ある中東の国が原子力導入計画に際して行った、技術提供国や周辺各国間との原賠法の整備に関する交渉具体例の紹介があった。日本の原子力産業界の海外進出において、この議論は避けて通ることはできないが、新規に原子力発電所の建設をしようとしている国々において、事前に関連する法規の整備をする重要性の認識が必要である。

④一般公衆とのコミュニケーション、原子力発電の経済性、新規発電所建設のファイナンス：一般市民やその他ステークホルダーの原子力 acceptability をどう促進するか、という観点からコミュニケーションスキルを学び、ケーススタディーを通じて体験した。さらに、原子力業界におけるコミュニケーションでは、国際的に技術・規制の standardization・harmonization をどのように推進するか、CORDEL^{※1}, MDEP^{※2}などの事例を通じて学んだ。また、新規発電所建設プロジェクトのファイナンスについては、初めて原子力を導入する国々における建設費用の調達事例の紹介があった。ただ一部のファイナンス提供団体(lending institutions)は、原子力は高度な技術とみなすケースが多く、プロジェクトの成立性が低いと評価されがちであるため、新興国への支援は消極的である。そのため、一部の新興国においては、当分の間は、原子力技術を輸出しようとしている国や企業の支援に頼らざるを得ない状況が続くことが予想される。

[^{※1, 2} : CORDEL: Cooperation in Reactor Design Evaluation and Licensing、MDEP: Multinational Design Evaluation Programme]

2. 2 Technical tour visits

Technical tour visits はフィンランドの Onkalo 中・高レベル放射性廃棄物の地層処分施設（Posiva 機構）、Olkiluoto (TVO 電力会社) 及び Lovisa (Fortum 電力会社) 発電所を一週間かけて見学した。フィンランドのロビー活動団体(Federation of Finnish Technology Industries)の幹部からは、地層処分サイト選定・建設開始までに同国原子力産業界が行った国民及び政治家とのコミュニケーション（ロビー活動）の事例紹介があった。その中で、フィンランド国民の原子力への acceptability が大きい事（特に原子力施設立地地域）の要因の 1つとして、原子力産業界全体が協調して PR をしていることに加えて、ロビー活動家や原子力産業従事者は該当する地域の出身者が多いことから、地域住民とオープンに会話できていることが強調された。当該事例から、原子力の acceptability 向上のために、政府、電力会社のみならず、原子炉メーカを含む原子力産業界全体の団結が必要であることを確認した。

2. 3 Group discussions

Group discussions では、チーム毎（各チームは約 8 名の fellow と及び専属の指導者（mentor）で構成され、約 2 週間ごとにメンバーの入れ替えがある）に分かれ、毎日 3 時間程で特定のテーマについて討議をした。第一回のテーマは、各国における原子力政策について当該国の fellow から説明を行い、質疑応答を行った。その後、日々の講演に関するパネルディスカッションの準備、ロール・プレイの準備を行った。最終週には、チーム毎に卒業テーマが与えられ、チーム全員でテーマに関する調査・討議を実施し、最終プレゼンテーションを行った。

日立 GE ニュークリア・エナジー（株）
アンドリュー篠原 キリンガきこんぼ
2013年9月26日

報告者が配属されたチームは「原子燃料の再処理の必要性」をテーマとして取扱った。最終発表では、他の fellow の前で国会討論会を模擬した「エネルギー政策討論会」でのディベートを行った。当グループの構成は、アメリカ・カナダなどの再処理に消極的な国々が半数を超えていたこともあり、再処理を推進している日本とは明確な違いがあった。卒業テーマを討論した短い期間では、そのギャップを埋めることができなかったが、互いの国の政策の違いを十分に認識し、国際舞台でのコンセンサスを得る難しさを体感した。

3. 感想及び提言

以下に WNU-SI への参加を通じて得られた感想と提言を示す。

- ・ 短い期間で、原子力産業のフロントエンドからバックエンドの全サイクル、炉型の比較、原子力に関わる法律など多くの知見を得ることができた。
 - ・ WNU-SI では、オープンに議論・討論ができる環境が整備されており、研修生（fellow）と講演者、fellow 同士でも多くのことを学びあうことができた。第二週以降においては、日本以外の講演者から日本の原子力政策や軽水炉技術についての一部不正確もしくは、偏ったコメントを含む講演が度々あり、報告者から積極的にクラリフィケーション・質問・訂正をしたり、各国の fellow に正確な状況を説明したりした。また、他の fellow も不正確な情報発信した講演者に対して同様な指摘・修正をする場面もあった。
 - ・ WNU-SI では、単に聴講するだけでは無く、積極的に講演者に質問をしたり、休憩時間中に、講演者や他の fellow と議論したりすることにより、理解を深めることができた。来年度以降の日本からの参加者も、英語力のみではなく、日本国内外の原子力業界の動向や知見を幅広く知り、柔軟に議論ができる力量のある 30 代の方々の派遣が望ましいと感じた。
 - ・ 各国の fellow には、WNU-SI 主催の social activities や fellow 自身が自主的に主催していた討論会などを通じて、彼らが持っていた日本の原子力業界に関する疑問に答えることで、日本の現状への理解を深めてもらうことができた。また、反対に彼らの出身国に関する多くのことを学ぶことができた。
 - ・ WNU-SI 参加の目的の一つだった参加者とのネットワーク形成については、fellow、講演者、mentor との積極的に関わることにより、達成できたと考えており、今後はこのネットワークの維持に努めていく。
 - ・ 世界各国が福島事故の対応について日本からの情報発信を要求している中で、WNU-SI で講演した日本の代表者は 1 人のみだった（大学出身）ことは残念であった。日本の原子力産業の状況をどう海外に伝えていくべきか、多くの課題が山積していることを再認識した。
- また、これから欧州や新興国市場などへの海外進出をしようとしている日本の原子力産業界からの講演者としての WNU-SI 不参加は、広報機会のロスと考える。今後の各原子炉メーカーの WNU-SI への参加の働き掛けは、各社の fellow から行わなければならないと思っている。
- ・ 今後の参加者には、自身の出身母体を代表するだけでなく、日本を代表することを十分に認識した上で WNU-SI に参加することを切望する。特に、日本の原子力産業界を広く理解すること、英語で発言する勇気を持つこと、他の国々の関係者の意見を柔軟に受け入れると同時に、自身の考えをしっかりと持つことが重要であり、そういった態度で臨むことで WNU-SI の研修目的の一つである将来の原子力リーダーの育成がなされると確信した。

4. 謝辞

今回の WNU-SI への参加という大変貴重な機会を与えて頂くとともに多大なご支援を下さった日本原子力産業協会（向坊事業）に御礼を申し上げたい。また、報告者の長期間に渡る不在を受容し、支援してくれた家族、同僚を含む多数の関係者への謝意を表したい。

以上。

世界原子力大学 2013 年夏季研修 参加報告書

報告者：独立行政法人日本原子力研究開発機構 橋口緑

2013 年 6 月 29 日～8 月 11 日まで、「世界原子力大学 2013 年夏季研修」に参加した。研修は例年通り、午前中の講義と午後のグループワーク、1 週間にわたる施設見学のほか、様々な課外交流会が用意されていた。今年の施設見学は、フィンランドのオルキルオト及びロヴィーサの原子力発電所と廃棄物処分場であった。

午前中の講義では、各国の原子力・エネルギー情勢、途上国における原子力発電所の新規建設などの政策や、次世代原子炉の技術についての解説のほか、核不拡散、安全文化、広報、経済及び法学等の社会科学に関する内容について各国の著名な機関から招へいした専門家について講義を聞くことができた。

また午後のグループワークは、2 週間毎に 8 名程度のグループを編成し、午前中の講義について考察したあと講師に質問したり、講師から課題が出る場合には回答を作成してプレゼンテーションを行ったりした。課題に対するプレゼンテーションは、2、3 名が口頭で発表することもあるが、事例を説明するために演劇形式をとり全員が参加することが多かった。最後の 1 週間はトピックによるグループ編成となり、出張者は再処理の利点・欠点について選択し、同じトピックを選んだフェローと考察し発表した。

フィンランドの施設見学では、オルキルオト原子力発電所と同サイト内にあるオンカロ最終処分場と、首都ヘルシンキの近くのロヴィーサ原子力発電所と同サイト内の低・中レベル放射性廃棄物の処分場を見学した。両発電所とも管理区域の立ち入りはできず、外から外観を見るのみであったが、オルキルオト原子力発電所では現在 3 号機を建設中であり日本で見ることのできない EPR の建設現場を見ることができた。またロヴィーサでは使用していない原子炉の部品を保管している倉庫を見学し、旧ソ連型の PWR の部品内部を観察することができた。

その他の課外交流会では、世界遺産であるブレナム宮殿へのバス旅行や、日本を含む各国のフェローが自国の食文化や観光などを紹介する「カントリーパーティー」などが催され、単なる研修の同期というだけではなく、それらを通して同世代の友人を作る良い機会となつた。

成果・反省について

講義の内容は幅広く包括的で、日本と異なる政策や、日本ではあまりなじみのない技術の解説があり興味深く、魅力的と感じるものもあった。逆に、たとえば使用済み燃料の再処理について多くの国では核不拡散問題と結び付けて考えるためあまり賛成しない人が多いことや、福島原子力発電所の事故はそれほど深刻であったとは考えられておらず、今でも原子力発電に賛成する国民が増えていることなどにおいて、日本と考え方の違いを知ることができた。

日本を含め参加者の大半は研究・技術職であり、最初のグループの自己紹介の時点で負い目を感じていたが、研修内容は包括的であり、時間も限られていたため、それほど特定の専門分野に入ることはなく、むしろ日本の原子力政策の幅広さを実感することとなった。各国の事情に応じて採られている政策を知る機会であったと共に、他国の政策をそのまま日本に導入するのは難しいと感じた。逆に安全文化や広報などに関することはどの国でもあまり変わらないということも知った。また日本は原子力において世界をリードしているとあらためて実感した。

グループワークでは、講義後に発表される課題の消化・考察・発表の準備を2時間以内で行わなければならないことと、人前で発表することの緊張とで当初は戸惑ったが、いずれのグループのメンバーも親切で、わからないことを教えてもらいながら週に3、4回の発表をこなすことができた。少し丁寧さに欠けた等の反省点はあったものの、他メンバーのおかげで限られた時間で課題を仕上げるということと、人前で物怖じしないことが自然とできた。

リーダーシップ育成について

「Protect the Core」が研修のキャッチフレーズのようになっていたが、私が理解したリーダーシップで重要なことの一つが「ぶれない」ことであった。自分の仕事に自信がなければ理想的なリーダー像と言えず、特に2011年以降は周囲の厳しい目により自信を無くしているところだった。しかし今回の研修では、自分と同世代の人が世界中で原子力の平和利用のためそれぞれの立場で努力していることを知ったことと、研修において同じ課題について考察する時間を共有したことにより、原子力に対して厳しい目の多い日本でも、原子力業界に従事していることについてさらに自信をつけることができた。ただし、講義・グループワークの作業だけではなく、友人として交流を深める機会がなければこのような自信はつかなかつたと考える。人として信頼し、尊敬できる人が同じような目的をもってそれぞれの国で活躍していると知ることができたこと、逆に同じ目的をもって活躍している人たちと友達になれたことも大きな成果の一つである。

今回の研修でできた友人と、今後個人的な交流だけでなく仕事上の協力関係を築いていきたい。

2013年度世界原子力大学夏季セミナー参加報告書

株式会社 東芝
 電力システム社 原子力安全システム設計部
 伴 雄一郎

1. 概要

2013年6月29日から8月9日までの6週間、英国オックスフォード大学 クライストチャーチカレッジにおいて開催された世界原子力大学夏季セミナー（以下、WNU-SI）に参加した。本年度のWNU-SIの参加者は72名であり、24ヶ国からの参加であった。参加者の構成は図1の通りである。多くの原子力発電所の建設が計画されている、中国及びインドからの参加はなかった。

WNU-SIは基本的に、午前中では世界の原子力関連機関の講師による講義があり、午後は8~9名のグループに分かれて午前中の講義内容についての議論を行った。また、第3週目にはフィンランドへのテクニカルツアー、第6週目にはフォーラム・イシュー・グループと呼ぶプレゼン発表を行った。

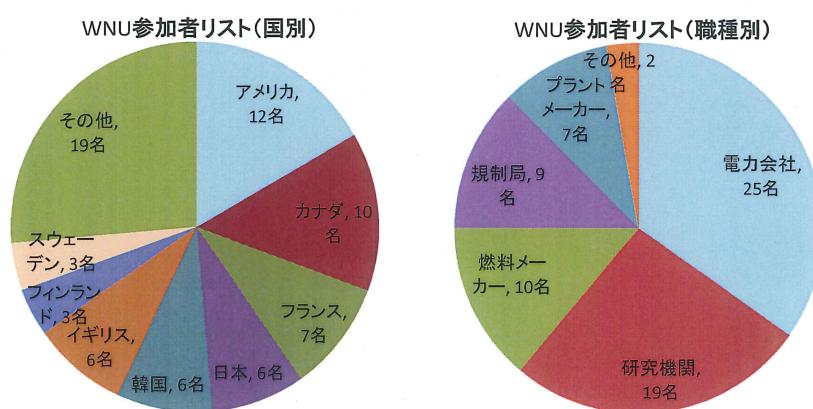


図1 WNU-SI 参加者構成

2. WNU-SI の講義内容について

2.1 講義の概要

講義は1回当たり1時間~1時間30分程度であり、講義内容は1週間ごとにテーマが分かれている。1週目は気候変動や今後の原子力の動向、2週目は世界の原子力産業の構成、4週目は核不拡散や原子力関連の法令、5週目はパブリックアクセプタンス、原子力の経済性の講義があった。講義の中でも、プレスカンファレンスを模擬したケーススタディは日本にはない講義であるため、印象的であった。講師として日本からは、元原子力委員の尾本先生が参加していましたが、尾本先生がIAEAに在籍していた時はプレスカンファレンスの実習は年に数回あるとのことであり、日本と欧米の教育方法の違いについて実感した。

2.2 ディスカッション

午後に行われるディスカッションでは、国籍、男女比、職業等を考慮して、バランスよく振り分けられていたため、多角的な視野から議論を深めることができた。バックグラウンドとなる知識量の差異により、ディスカッションでの積極性は多少変化するが、多くの参加者は常に積極であり、議論を

深めることができた。WNU-SI でのディスカッションは、日本人同士の議論スピードとは全く異なり、非常に早い。そのため、日本人にとって最初は違和感があるかもしれないが、海外でのビジネスで勝ち残っていくためには、スピードの速い議論が出来るようになるのは必須である。議論についていくために、相手の発言の意図が分からなかつたら質問して自分の理解を深めると共に、自分の発言を相手に遮られないように、発言する際には手を挙げるなど周りにアピールする工夫をした。

2.3 テクニカルツアー（第3週）について

3週目はフィンランドへ行き、オルキルオトサイトやロヴィーササイトの見学を行った。オルキルオトサイトでは、OL-1,2号機の稼働率が95%程度を達成しており、定検工期短縮やプラント寿命を常に40年に保つための取組みについて説明があり、TVOの創意工夫を感じることができた。また現在、世界で最も進んでいる使用済燃料処分場のオンカロサイトの見学もすることができ、非常に多くのことを学べた。

一方、ロヴィーササイトの見学については、失望した。海外のプラントは日本のプラントとは異なり、発電所内に見学者用通路がない。そのため、核セキュリティ上の問題でプラント内の見学は困難である。オルキルオトサイトではプラント内は見学できなかったが、プラントの周りをバスで回り、非常に丁寧な説明もして頂き、中身の濃いものであった。一方、ロヴィーササイトは、バスで発電所の周りを回ることもなく、圧力容器等が置かれている倉庫の見学等であった。

2.4 リーダーシップ論と他国の参加者との交流

WNU-SIでは、原子力に携わる多くのリーダー（例、DOE事務次官）より、リーダーシップ論について講義があった。講演者によってリーダー像は異なるが、「他者からの信頼を得る」という要素は、全ての講演者が強調をしていた。このことは、他国の参加者との交流の際にも感じた。同じ国の人たちとは異なり、他国の参加者との交流では、前提となる常識が異なる場合がある。そのため、他国の参加者と親睦を深めるためには、「他者からの信頼を得る」について真剣について考え、実践する必要がある。WNU-SIではリーダーシップ論を学び、実践し、その過程で海外とのネットワークもできるため、今後の原子力産業の発展のためにも貴重な機会であった。

3. WNU-SI を修了して

WNU-SIに参加できて非常に幸運であった。WNU-SIの参加者は各国を代表して参加しているため、参加者の質は高く、自分に不足している部分や自分の強みについて気付くことができた。資源が少ない日本が今後も世界で生き残っていくためには、今まで以上に海外で戦って勝ち残っていく必要がある。今後の日本の原子力産業を支えていくためにも、常に向上心を持って自分の能力を磨いていく所存である。

帰国後は、WNU-SIで知り合った他の参加者とFacebookを使って連絡を取っている。WNU-SIでは多くの海外の友人を得ることができたので、WNU-SIで構築したネットワークを継続していくことが今後の課題である。最後に、研修に参加する機会を与えてくれた職場の方々と日本原子力産業協会殿に感謝の意を述べ、本文章の結びとする。



尾本先生と日本人参加者

2013年度 世界原子力大学 夏季研修 参加報告書

関西電力株式会社 吉井 敏浩

- 【日 時】 2013年6月29日～8月10日（約6週間）
【場 所】 Oxford University, Christ Church College（イギリス）
【参加者】 24の国と地域から73名が参加
【概 要】 世界原子力大学のプログラムは週毎にテーマが決められており、それに沿って講義やディスカッションが行われた。基本的な形式は、午前中に講義、午後にワーキンググループ活動として午前中の講義のレビューや疑問点抽出を行って全体で共有する、若しくはケーススタディを行うというもの。以下、各週のテーマに沿って報告する。

1. 第1週<世界の現状>

世界のエネルギーの需要と供給、気候変動、エネルギー政策といった基本的な事項から、原子力メリットについての講義を受けた。また、グループに分かれてのブリッジコンテストと自己紹介を行った。

ブリッジコンテストとは、メンバーの結束を高めることを目的に、決められた量の新聞紙とテープで橋を作り、その強度を競うもの。この活動を通じて、自ら提案したり、他人の意見についてディスカッションしたりといったお互いに言い合える関係が構築できた。コンテストでは、優勝することができた。

自己紹介では、バックグラウンドや業務経験、現在の業務、更にはプライベートについても互いに発表し、親交を深めた。また、それぞれの国のエネルギー政策についても紹介した。日本が2度のオイルショックを契機に原子力利用を推進した事、震災前後でのエネルギー利用の比較、新規制基準の概要と再起動に向けたプロセスについて説明した。参加者からは、法律を無視した様々な手続きやそのツケを電力会社が負担していることについて、信じられないといった反響があった。

2. 第2週<原子力産業>

原子力発電所の設計（第3世代、第4世代、SMR）、核燃料サイクル、廃止措置、発電以外の原子力利用方法についての講義およびこれに関するディスカッションを行った。

印象的だったのは、航空業界では、原子力と同様に旧設計と最新設計のものが共存しているなかで、旧設計のものが良好な運転実績を積み重ねていることであった。航空業界も特に高い安全性が求められるものであり、ここから学ぶものは多くあると思った。

3. 第3週<フィンランドへのテクニカルツアー>

オルキルト発電所、ロビーサ発電所他を訪問して、施設見学を行った。

オルキルト発電所では、定期検査の短縮への取り組みについて説明を受けた。また、高レベル放射性廃棄物（使用済燃料）の最終処分場（ONKALO）の建設予定地を見学した。日本と比較すると定検は非常に合理的で短期間のうちに実施されること、放射性廃棄物の処分場がある点で、規制当局や地元とのコミュニケーションがしっかりと図れている印象を受けた。

ロビーサ発電所では、福島第一原子力発電所事故以降に実施したストレステストを実施して安全性を確認すると共に、更なる安全性向上を検討していた。また、使用済燃料貯蔵設備では、通常の冷却系統に加え、空冷式の冷却系統を追加しているとのことであった。

フィンランドの産業界が一体となって、積極的なロビー活動や公衆の原子力に対する理解を深める活動を展開している点に見習うべきものがあると感じた。

第4週<放射線防護／原子力安全／法令／核不拡散と安全保障>

放射線防護、安全文化他について講義およびこれに関するディスカッションを行った。

放射線防護では、被ばくの実態として、原子力発電による被ばくは全体の1%にも満たないことに驚いた。放射線防護に関しては、国際的な基準に従うことが重要で、国際社会が足並みを揃えた対応を行うことが非常に重要であることに共感した。

安全文化の醸成が、これから原子力の安全性を高めるのに非常に重要な事項であることが、多くの講演者が口を揃えて説明されていたことから印象に残った。INPOのガイドブックが具体的にあるべき姿を解説しており、有効なツールだと思った。

4. 第5週<コミュニケーション／経済／新規プロジェクト>

コミュニケーションに関する講義では、相手のことを十分に理解すること、同じ内容を伝えるにあたっても相手にメリットがあるような表現を使うことの重要性について説明があった。また、近年急速に発展しているソーシャルメディアをいかに上手く活用するかという点も重要であるとのことであった。

日本人メンターの尾本先生による福島第一原子力発電所事故に関する講義が開催された。研修期間中、折に触れて様々な方が事故について言及されることがあったが、いずれも誤解や誤認があった。私自身もディスカッションや日常会話の中でこれを正そうと努めたが、今回の講義が正確な情報発信の機会となつた。

5. 第6週<フォーラム・イシュー・グループ／総括>

フォーラム・イシュー・グループでは、各自が興味のあるテーマを選定し、それについて深く議論を行った。選択したテーマは「公衆の原子力に対する恐怖心」で、原子力に対する恐怖の根源となる要素を抽出し、これらを払拭するようなメッセージを発信する映像を製作した。映像は、不安をあおるような表現を使ったものと、原子力のメリットを前面に押し出して安心できる表現の2つとした。2つの映像についての感想を聞くと、不安をあおる表現の方が危機感に訴えかけるため有効ではないかとの意見が大半であった。これを通じて、情報発信にあたっては、感情に訴えかけること、正確な情報を出すことが重要であることを実感できた。

6. リーダーシップ

原子力に関する様々な団体からトップクラスの方々がリーダーシップについて、思いを語って下さった。心に残った言葉としては、リーダーシップは個人に生まれつき備わる素質ではないこと、いかに周囲の人間が働きやすいように仕えるか、確固たる目標を持つことでその影響を周囲の人間に波及させていくことがあった。これまで自分の中で明確でなかったリーダーとしての要素について、気づくきっかけとなった。

【感想】

異なる言葉、宗教、文化の人が一同に集まり、原子力を活用して共に繁栄していくこうという思いを共有できたことが、非常に意義深かった。自らを奮い立たせるいい刺激となった。自分の周囲にも今回の経験で得たものを発信することで、共に働く仲間のモチベーション向上にも繋げたい。

以上